



動物も心の医療に参加、アニマル・セラピー



日本では、長い間「医療は、医者と看護婦に任せておけ、素人は口出しするな」という雰囲気があった。これが大間違いであったとは言わないが、ここに来て限界が見えてきた。

何より患者さん自身の意見とか希望を、もっと取り入れるべきだし、いろいろな分野の人の力を借りないと、やっていけない状況になってきたのだ。これに医療人もやっと気づいて、地域でも、ボランティアや福祉関係の人たちと協力体制が築かれつつある。こうなると、人間だけでなく、「動物にも力を貸してほしい」という発信が出てきても不思議はない。「アニマル・セラピー」が、このような考えから生まれた。

大体、ペット動物というものは、人の心を和ませる。だからこそ、もう何千年前から、人は犬とか猫とか、大して実用上の役に立ちそうもない動物を飼っているに違いない。心を病む人の治療に、これを使うことができないか？

そんなわけで、欧米では、このアニマル・セラピーが、かなり盛んになっている。心の病に対してだけではない。例えば、末期がんや腎臓透析の病棟を犬や猫が訪問する。リハビリテーションだって、器具を使ってやるよりも、ロバに乗ったり、犬を連れて散歩したほうが、はかどる。自閉症の子どもが、鳥の世話をする。それを介して、人とのつきあいも学ぶ。イルカと一緒に泳ぎ、「不思議なパワーをもらったような気がする」と語る、ノイローゼの患者さんもある。

こういうことは、アメリカで実際に行われている。欧米には、「どうやったらアニマル・セラピーの効果を高めることができるのか」皆で考える学会だってある。もちろん、この学会で意見をだすのは、犬ではない。ボランティアの人たちだ。皆で知恵を出し合っている。犬の意見を聞かなくても、参加するペット自身に負担をかけないように配慮することも忘れていない。

実は、日本でも活動が始まっている。例えば、日本動物病院福祉協会では、7年前から病院のペット動物(主として犬)の訪問活動を続けている。私が前に働いていた立川病院でも、この団体に訪問をしてもらっていた。患者さんの評判は上々。

いや、実に驚くべきことだが、誰にも心を開かない精神病患者さんがニコッと笑ったりして、穏やかになった。自分の飼っていたペットの話で、ボランティアと患者さんの話も盛り上がる。犬の簡単な芸で、爆笑が起こる。これをきっかけに、リハビリテーションが進んだ患者さんもある。単なるレクリエーションだけとはいえないような効果があるのだ。

動物のパワーというものには、手応えを感じたのだが、ここに参加していた犬は、ちゃんと訓練を受けた認定犬で、いわばプロである。こんな効果があるのなら、こういうプロの犬猫を育成するシステムを、もっと本格的につくるべきではないか。病院に動物を連れてくる以上、何か病気をもってないか、清潔なのかを、きちんとチェックしておく必要もある(日本動物病院福祉協会では、この点が非常にしっかりしている)。

欧米に比較すると「ペット文化が浅い」と言われる日本で、アニマル・セラピーが一般化するためには、この辺りがポイントだろう。さらに言えば、介護保険を含めて保険制度を含めて保険制度の中に「ある程度のアニマル・セラピーを位置づける」という行政の理解が、決定的な後押しとなるだろう。(NHKきょうの健康より)

